未来のために水と向き合う

福島県　葛尾村立葛尾中学校　三年　松本　晴樹

お正月、テレビを見ていると揺れを感じた。放送がすぐに切り替わり、能登半島沖の様子が映し出された。ひどい揺れ、津波警報、新年早々の平穏なお正月ムードも一瞬にして遮られた。ニュースで溢れる水やぐちゃぐちゃになった建物を見る度に心が痛くなった。

東日本大震災では福島県も甚大な被害を受けた。私の住む葛尾村は双葉郡にあり、山間部にあるため地震と原発事故の被害はあったものの津波被害は免れた。私は震災当時、産まれたばかりでもちろん記憶はない。避難先を転々としたことなど、理解できるようになってから家族に聞いた。

こうした自然災害には、水が関連している。津波、河川の増水、土砂災害。水は有限の資源として大切にし、大事にしなければいけないが時に自然災害として牙をむく。私は海も川も大好きだ。今住んでいる葛尾村は、川のせせらぎを楽しめる環境にあるから余計にそう思う。私たちは、自然を守るために環境に優しい生活を心がけている。エコバッグを使い、水筒を使い、トイレは小で流す。水を大切に使うことが以前よりは定着してきている。そして、水の自然災害から自分たちを守る対策も同時に立てていく必要がある。エコな生活と、災害に備える準備を同時に。有限である水の使い方、いつどこで起こるかわからない災害に備えるのだ。私たちの生活と水は結びついている。だからこそ、真剣に今、向き合わなくてはならない。自分には関係ないと、見て見ぬふりをしないことが一番大切だ。

当たり前の日常が「当たり前」ではなくなったときに気付くのでは遅い。水が無くなったとき、津波や水害に襲われたとき、そのときに日常の素晴らしさや大切さに気付くのではなく普段から水について意識して過ごさなければならない。自然災害を防ぐことは困難だが、自然を理解し、私たちが対策を立て、備えることは可能だ。

総合的な学習の時間に、村役場を訪れ、村のハザードマップの説明を受けたり、備蓄倉庫の見学に行ったりした。村民が三日過ごせる量の食料や毛布、おむつなども積み重なっていた。今回見学したことで家族とも災害時の行動、避難経路について話し合えた。山に囲まれた葛尾村だからこそ土砂災害が起きた際、慌てないためにも確認しておくことが必要だ。いざ被害に遭ってもハザードマップに従い安全な道を通って落ち着いて避難することができる。村民のみなさんにもマップの使い方や危険箇所をもう一度提示していきたい。

今年度、村の復興交流館で学習成果物を販売し、売り上げたお金をユニセフに募金した。家庭科で作成したバッグや張子、国語で作った漢字キーホルダーを一つ百円で売り、一万八千五百五十円を寄付した。ユニセフでは世界中の村々に、清潔な水を届けられるよう井戸などの給水設備を作っているそうだ。私たちの活動が、少しでも世界中で水に困っている人のためになれば嬉しい。汚い水を飲むしかない子供の未来を、明るく照らしてあげたい。水の環境が悪い方々は世界人口の半数以上もいて、苦しんでいる。日々のありがたさを忘れないことが、当たり前の日常に感謝する一歩に繋がる。これからも積極的に募金活動を続けていきたい。そして、私たちは能登半島沖地震を受けてさらに募金活動を行った。ユニセフに協力したときと同様に張子やバッグを売り、チャリティー形式にした。微力ながら一万四百円を寄付することができた。

水は私たちに当たり前の生活を与え、ありがたい日常にしてくれる。一方で、水の自然災害は尽きない。水について一人一人が考えていかなければならない。能登半島沖地震で被害に遭われたみなさんや世界中の水に困っている人々の笑顔が戻りますように。世界が人を豊かにする水で溢れることを願っている。